先従レ隗始メヨ

要旨

燕国再建のための人材招致策を昭王から諮問された郭隗は、「まず私を厚遇することから始めてください。そうすれば、私より有能な天下の優れた人物は争ってやって来るでしょう。」と進言する。それが見事に成功し、多くの有能な人材が燕を目指して集まってきた。

構成

段落	ページ・行	段意
第一段	初め〜P一三四・6〈得二身事一之。〉	燕の昭王は、斉に打ち破られ疲弊した自国を再興するために、ともに国を治めることのできる賢者の推薦を郭隗に諮問した。
第二段	P一三四・7〈隗曰〉〜P一三五・3〈豈遠二千里一哉。〉	死んだ名馬の骨を買って帰り、後に生きた名馬を呼び寄せることに成功した涓人の話を持ち出した郭隗は、自分を厚遇すれば自分より優れた人物は必ずやって来ると昭王に進言する。
第三段	P一三五・4〈於レ是〉〜終わり	昭王は進言どおり郭隗を厚遇したところ、優れた人物は先を争って燕に駆けつけた。

訓読と現代語訳

【第一段】①燕人太子平を立てて君と為す。②是れ昭王たり。③死を弔ひ生を問ひ、辞を卑くし幣を厚くして、以て賢者を招く。④郭隗に問ひて曰はく、「斉孤

【第一段】①燕の人々は太子の平を位に即けて君主とした。②これが昭王である。③（昭王は）戦死者を弔い、生存者を慰問し、へりくだった言葉遣いをし、多くの進物を用意して、（天下の）賢者を招こうとした。④（そこで）郭隗に質問して言った、「斉は私の国が乱れているのに乗じて、不意に攻め込んで（我が）燕を攻め破った。

の国の乱るるに因りて、襲ひて燕を破る。孤極めて燕の小にして以て報ゆるに足らざるを知る。誠に賢士を得て与に国を共にし、以て先王の恥を雪がんこと、孤の願ひなり。先生可なる者を視せ。身之に事ふるを得ん。」と。

【第二段】⑤隗曰はく、「古の君に、千金を以て涓人をして千里の馬を求めしむる者有り。死馬の骨を五百金に買ひて返る。君怒る。涓人曰はく、『死馬すら且つ之を買ふ、況んや生ける者をや。馬今に至らん。』と。期年ならずして千里の馬至る者三。今王必ず士を致さんと欲せば、先づ隗より始めよ。況んや隗より賢なる者、豈に千里を遠しとせんや。」と。

【第三段】⑥是に於いて、昭王隗の為に宮を改め築きて、之に師事す。⑦是に於いて、士争ひて燕に趨く。

私は（我が）燕が小国で（今の国力では）仕返しをするのに力不足であることを十分に承知している。ぜひとも賢士を得て（その人と）共に国を治め、そして先代の王の恥辱をすすぐことが、私の願いである。先生、適当な人物を推薦していただきたい。私は自らその方を師として（敬い）仕えたい。」と。

【第二段】⑤（それを聞いた郭）隗が言った、「昔ある国の君主で、千金を持たせて涓人（君主のそば近くに仕え、日常の世話をする者）に一日に千里を走る名馬を（買い）求めさせたことがありました。（ところが、その涓人は）死んだ名馬の骨を五百金で買って帰って来ました。君主は怒りました。（すると）涓人が（答えて）言いました、『死んだ名馬（の骨）でさえ（高い値で）買った（のですから）、まして生きている名馬ならなおさら（もっと高い値で）買ってくれる（と人々は考える）でしょう。（ですから）馬はすぐにもやって来るでしょう。』と。（その言葉どおり、）まる一年もたたないで一日に千里を走る名馬が三頭もやって来たということです。今王様がぜひとも優れた人物を招きたいとお思いならば、まずこの（郭）隗からお始めください。（私のようなものでも厚遇されたとなれば）ましてこの隗より賢い人は、どうして千里の道のりを遠いと思いましょうか（、いや、思いません）。」と。

【第三段】⑥そこで、昭王は（郭）隗のために邸宅を新しく築いて、彼を先生として（敬い）仕えた。⑦こうして、（これを聞いた）天下の優れた人物は先を争って燕に駆けつけた。

学習活動のポイント

導入

学習活動のポイント

❶「戦国時代」の概略と燕の混乱した理由を理解する。
❷「十八史略」の概要を理解する。

❶漢和辞典・インターネット・資料集などを用い、グループで調べさせる。この調査や説明に、多くの時間を費やすことができないので指導者が事前にまとめたプリントを用意し配布する。また、そのポイントだけを板書して理解させてもよい。「戦国時代」の概略については、後出「解説―戦国時代の概略―」を利用してプリントを作成する。（「鶏口牛後」の「学習のポイント」1参照。）燕の混乱した理由については、斉によって昭王の父・噲（かい）が殺され、燕が大敗し混乱した経緯を理解させる。
❷漢和辞典・インターネット・資料集などを用い、グループで調べさせたものや教科書P一四三の説明を用いて理解させる。また、時代を強く生きた人々の、興味深いエピソードで「十八史略」が組み立てられていることに注意させる。

展開

学習活動のポイント

❶本文を黙読する。その後、範読を聞く。
❷一斉読みをする。その後、グループ内で読み合う。
❸「先従隗始」の本来の意味と、現在使われている意味の違いをグループで調べ、それを参考に、この話の要旨をまとめ、発表する。知技(2)エ【「言葉と表現」1】
❹現代語訳をする。知技(2)ウ
❺内容読解をする。
❻戦国時代に生きる「説客」の心理をグループで話し合い、代表が発表する。
❼昭王のものの見方や考え方を、本文に即してまとめる。思判表B(1)イ【「学習のポイント」1】

❶範読はゆっくり丁寧に読む。
【注意させる読みの箇所】
「有下以二千金一使三涓人求二千里馬一者上」「死馬且買レ之、況生者乎。」「況賢二於隗一者、豈遠二千里一哉。」
❷大きな声で読むよう指導する。
❸辞書で調べた「先従隗始」の本来の意味と現在使われている意

味を確実に把握し、それを参考に、要旨をノートまとめ、発表させる。（五十字程度。）要旨の発表は、黒板に板書させてもよいし、口頭で発表させてもよい。

【評価】「言葉と表現」1を行い、古典の言葉と現代の言葉とのつながりを理解しているか、ノートや提出物などにより確認する。

❹第一段落と、第二・三段落に分けて現代語訳をする。生徒数名を指名し、現代語訳させる。難解な箇所については、生徒の発表状況を見て指導者が補足する。

・第一段落

【注意すべき語句】「弔レ死問レ生」「卑レ辞厚レ幣」「孤」「与共レ国、以雪二先王之恥一」

・第二・第三段落

【注意すべき句形】「使三涓人求二千里馬一者」（使役形）「死馬且買レ之、況生者乎。」（抑揚形）「況賢二於隗一者、豈遠二千里一哉。」（反語形）

【注意すべき語句】「涓人」「千里馬」「致レ士」「師事」

【評価】【注意すべき語句】を正確に現代語訳できているかを確認し、漢文を読むために必要な訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解しているか、ノートや提出物などにより分析する。

❺次の**ア**～**オ**のポイントに注意する。**ア**「先王之恥」とは何か、**イ**燕の昭王はなぜ賢者を求めるのか、**ウ**「千里馬」「死馬」は、それぞれ誰をたとえているか、**エ**「先従レ隗始。」とは、誰が誰に何を求めたのか、**オ**昭王が郭隗のために邸宅を新しく築いて、師事した効果。それぞれグループで話し合い、代表が発表してもよい。

アイ…第一段落の昭王の会話に注意させ、そこから考えさせる。

ウ…内容より考えさせれば解答は出よう。

エ…「『始』の意味するところは、郭隗の要求を表現している。どのような要求をしたか。」という助言を与える。

オ…「郭隗でさえも厚遇するということが、戦国時代に生きる『説客』たちをどういう気持ちにさせたか。あなたが『説客』だったらどう思うか。『説客』の心理を考えてみよう。」という助言を与える。

❻グループで話し合わせる際、「『戦国時代の概略』プリントから戦国時代の風潮や時代の気風を読み解き、その中に生きる説客の気持ちや心意気を説明しよう。」という助言を与える。

❼昭王のものの見方や考え方は、昭王の言葉の中に表現されているので、その言葉をグループで吟味させる。その際、昭王がどのような立場から、どのような視点で何を目的にしていたかを話し合わせる。その際、当時の時代背景や風潮・気風を参考にさせること。この当時の時代背景や風潮が、このような話を生んだことも理解させる。

【評価】昭王のものの見方や考え方を捉えているか、話し合いの観察などにより確認する。

■まとめ

学習活動のポイント

❶ 郭隗の弁舌の巧みさがどこにあるかをグループで話し合い、代表が発表する。思判表B(1)ア　主態〔「言語活動」1〕

❷ ❶で発表した自グループの考えについて、他グループから質問や意見を受け、それに対する返答を検討する。さらに、返答の仕方も工夫する。

❸ まとめの朗読をする。

❶「郭隗が用いたたとえ話に昭王が共感したから、郭隗を登用することになる。この話の、どのような点に共感したかを考えれば、その巧みさが理解できよう。」という助言を与え、グループで話し合わせる。

【評価】・郭隗の弁舌の巧みさについて、本文の内容をもとに的確に捉えているか、ノートや提出物などにより確認する。

・郭隗の弁舌の巧みさについて、グループ内で主体的な態度で話し合い、また、自分の考えをグループ内の他者に分かりやすく伝えようとしているか、分析する。

❷他グループの質問や意見を十分に検討させることは、生徒たちに考えを深めさせることになる。また、返答の仕方を工夫させることは表現の仕方の学習にもつなげられる。そこで、指導者は「他グループの発表を聞きながら、各グループはその理解に対する疑問点・質問や意見を考え、メモしておくこと。後ほど、それに対する話し合いをします。」という注意を与える。生徒が考えを深めるためには、他からの意見と自分たちの考えを検討するという「言語活動」が大事となる。

❸大きな声で各文の意味を考えながら、朗読させる。

発問例

●一三四ページ

問　**「卑辞」（3行目）の意味は何か。**

答　へりくだった言葉遣いをして。礼を尽くして。

問　**「以招二賢者一。」（3行目）について、**

[1]　「以」は上に述べたことを受けている。ここでは具体的にどのようなことを受けているか。

[2]　「昭王」が「招二賢者一」理由を簡単に述べよ。

答　[1]礼を尽くし、俸禄を高くすること。

[2]自国の再興と斉への報復のために、自分の補佐役となって国政を運営してくれる有能な人材を求めたから。（「賢者」と共に国力を高め、領土を奪われた先代の恥をすすぎたいから。）

補　戦国時代は、弱肉強食の時代である。君主は自国を強大にしなければ他国から侵略されることとなる。そのため、自国を強大にしてくれる、多くの優秀な人材が必要だったのだ。だから、君主は優秀な人材を厚遇したのである。

問　**「与」（5行目）の下に省略されている語を示せ。**

答　賢士

語句の研究

●一三四ページ

1先従レ隗始　賢者を招くには、まず私（郭隗）のような劣った者から厚遇しなさい。現在では、言い出した者からまず始めなさいの意に用いられる。

2燕　西周以来の国家。戦国の七雄の一つ。現在の河北省にあり、薊（現在の北京市）に都があった。西周創業期の功臣である召公奭が封じられた国家。

2人　ここの「人」は全ての人ではなく、一定以上の地位にある人である。「民」とは異なる。

2太子平　燕王噲の太子、名は平。諡は、昭王。前三一一年に即位し、前二七九年まで在位。燕王噲は、斉の使者として燕に来た蘇代（蘇秦の弟）の「堯・舜が賢者として後世尊敬されるのは、国を賢者に譲ったからです。王も国を宰相の子之に禅譲なさいませ。子之は受けようとしませんから、実質は失わずに禅譲したという美名を受け、王は堯・舜と同じになることができます。」という進言を受け入れ、だまされて全権を委ねてしまった。計略に成功した子之はこれをよいことに独裁政治を行ったために、国内は大混乱となった。かねて燕侵攻をねらっていた斉は、太子平に援助を約束し、挙兵を進めた。それによって、太子平は将軍市被と共に子之を攻めたが成功せず、やがて市被とも争うようになって、国内は内乱状態となった。斉はこれに乗じて燕に侵攻し、噲を殺し、子之を醢（塩漬けの刑）にした。結果、燕は大敗した。太子平が即位したのはそれから二年後である。

2昭王　前三一一年〜前二七九年在位。名は平。昭は諡。

2弔レ死問レ生　戦死者を弔い、生存者を慰問する。これは昭王の仁愛の厚さを示す表現。

3卑レ辞厚レ幣　へりくだった言葉遣いをし、多くの進物を用意する。「幣」は進物。ここは、俸禄でもよい。

3郭隗　生没年未詳。当時は燕の師傅（君主の師として、助言し補佐する役。教育顧問）であった。

3斉　西周以来春秋戦国時代にわたる大国。現在の山東省にあった。都は臨淄。周の初めに、文王・武王の功臣であった太公望呂尚が封ぜられた、姜姓の国家であった。春

問　**「共レ国」（5行目）とは、どうすることか。**

答　共に国政を運営し、国力を高めること。

問　**「先王之恥」（5行目）とは、どういうことか。**

答　**A**　**本文の内容から判断して答えよ。**
B　**実際の出来事を踏まえて答えよ。**
A斉によって燕が完膚なきまでに打ち破られたこと。
B昭王の父が斉の軍によって殺されたこと。

問　**「可者」（6行目）の意味を答えよ。**

答　よいと思う者。適格な人物。

問　**「得二身事一之。」（6行目）について、**
1　**「之」とは、何を指しているか。**
2　**「得二身事一之」という言い方には、「昭王」のどのような気持ちがうかがわれるか。**

答　1可者（適当な人物）
2ぜひともよい人物（賢士）を招きたい、という気持ち。

問　**「使三涓人求二千里馬一」（7行目）は使役形で「（　①　）に（　②　）させた」の意である。空欄①②を補え。**

答　①涓人　②千里の馬を買い求め

問　**なぜ古の「君」は怒ったのか。**

答　涓人が死馬の骨を買ってきたことを知った古の王は、自分の命令を守らなかったばかりか、たぶらかしたと思って怒った。

問　**「千里馬」（一三五ページ1行目）と「死**

秋時代には桓公が現れ、管仲を用いて覇者となった。しかし、彼の死後は国力が振るわず、しかも後には、陳からの亡命貴族である田氏に実権を奪われ、前三八六年には田和によって姜姓の斉は滅ぼされた。これ以後の斉を一般的に田斉と呼ぶ。田斉は戦国の七雄の一つとして活躍し、特に威王・宣王の時期（前四世紀末）に繁栄をするが、後しだいに衰え、前二二一年、秦の始皇帝に滅ぼされた。

3孤　私。諸侯の謙称。「寡徳曰レ孤」ことから「徳の寡ない者」という意味。「寡人」ともいう。

4報　仕返しをする。報復する。あだを討つ。復讐する。

4誠　ぜひとも。本当に。実に。

5与共国　「与」の後ろに「賢士」が省略されている形。「与二賢士一共レ国」（賢士と一緒に国を治め）の意。

5雪二先王之恥一　先代の王の恥をそそぐ。「雪」は、拭う。洗い清める。「先王」は、斉に殺された昭王の父、燕王噲のこと。「恥」は、斉に燕が完膚なきまでに打ち破られたこと。「指導上の注意点」参照。

6可者　適当な人物。これはよいと思う者。

6得二身事一之。　私自らその方を師として（敬い）仕えたい。「得」は「〜したい」という願望の気持ちを表す。「身」は自ら、自分自身。「事」は師として仕える。「之」は「可者」を指す。

7千金　金千斤。一斤は約一一〇グラム。

7使三涓人求二千里馬一　千金を持たせて涓人に一日に千里を走る名馬を（買い）求めさせたことがありました。「涓人」は君主のそば近くに仕え、日常の世話をする者。また、取り次ぎなども行う。「千里馬」は一日に千里を走る名馬。駿馬。当時の「一里」は、約四〇五メートル。古来、才能のある者のたとえに用いられる。「使」は「使二AB一」（AヲシテBセシム）は、AにBさせる。使役形。後出「句法」参照。

8死馬且買レ之、況生者乎。　死んだ名馬の骨でさえ（高い値で）買ったのですから、まして生きている名馬ならなおさら（もっと高い値で買ってくれると人々は考える）でしょう。「死馬」は、死んだ名馬。「A且B、況C乎」（Aスラ且ツB、況ンヤCヲヤ）は抑揚形。Aでさえもである、ましてCはなおさらである、とAを抑えて、Cを強調する句法。後出「句法」参照。

馬」（一三四ページ8行目）とは、それぞれどういうことを指すか。

答　「千里馬」は「賢人・賢者」であり、「死馬」は「郭隗」である。

問　「死馬且買レ之（スラヲツカフ）」（8行目）の意味と表現について説明せよ。

答　「死んだ馬でさえ買った」の意。「且」は「…（スラ）かツ」と読み、軽いものを挙げ、次に重いものを導き出す表現。

●一三五ページ

問　「況生者乎（ヤ）。」（1行目）の意味と句法を説明せよ。

答　「まして生きているものなら（もっといい値で）買ってくれるでしょう。」の意。「況…乎」は「いはンヤ…（ヲ）や」と読み、「まして…は言うまでもない。」の意。

問　「欲レ致レ士（セバサントヲ）」（2行目）とは、どういう意味か。

答　立派な人材を招こうとするなら、の意。

問　◉「先従レ隗始（ブリメヨ）。」（2行目）とは、誰が誰に何を求めたのか。

答　郭隗は昭王に自分のことを賢者として登用することを求めた。

補　「言語活動」解答例参照。

問　「豈遠（ニーセン）ニ千里（ヲ）一哉。」（3行目）は反語形であるが、普通の言い方で訳すとどうなるか。

答　千里の道を遠しとしない。

問　昭王が郭隗のために邸宅を新しく築いて、彼に師事した効果とはどのようなものか。

答　昭王が、郭隗のために邸宅を新しく築いて師事するという話題性のあるアピールをすることによって期待できる効果は、二つ考えられる。①このアピールによって、有能な人材を求める本気度を「戦国の説客」に対して示すことができるという効果が期待できる。さらに、②郭隗くらいでも登用したという話題性のあるアピールによって、自分も必ず昭王に登用されるはずだと考える「戦国の説客」の心を動かすことができるという効果が期待できる。結果、①②のアピールの効果によって、昭王のもとに多くの説客が集まることとなった。

補　「言語活動の解答例」参照。

問　「先従レ隗始（ブリメヨ）。」（2行目）について、⑴本来の意味、⑵現在、一般に使われている意味、を述べよ。

答　⑴賢者を招くには、まず私のような劣った者から重く用いなさい。
⑵まず言い出しっぺの君からやりなさい。
（手近なことから始めなさい。）

●一三五ページ

1期年　「期」は本来、月が一巡することを表し、一か月の意。転じて一定の時を表すようになった。「期年」は、まる一年。「期月」は、まる一か月。

2致レ士　優れた人物を招く。「致」は、まねく。あるものをそこに持っていく。「士」は賢士。優れた人物。賢者。

2況賢ニ於各隗一者、豈遠ニ千里一哉　「況…乎」の抑揚形と「豈…哉」の反語形が重なった形。後出「句法」参照。「況賢ニ於各隗一者」の上に「隗且用レ之」（隗すら且つ之を用ゐる＝郭隗でさえ登用したのだ）が省略されている。

キー・ポイント　反語の表現　「十八史略」は「豈遠二千里一哉。」と郭隗の言葉を反語形を用いて表現している。反語形は文意を強めるための強調表現であるから、ここは、「賢士は必ずどのように遠くからでもやって来る。」という郭隗の強い自信を表現したものと考えられる。結果、言葉どおり多くの賢士が先を争って燕にやって来た。郭隗は、有能な「戦国の説客」の心理を熟知していたからこそ、このように言えたのである。これは、文面には出てこない

が、郭隗は時代の風潮を鋭く分析する知見があったことを物語っている。

4 於是　こうして。そこで。それまでの記述を「こうして」と受けて、以下にある結末を述べる。

4 宮　邸宅。屋敷。古くは貴賤の別なく住居を宮といった。ここは、郭隗のために築いたのであるから、大きな建物であろう。

4 士争趨燕　「趨」は貴人の前を腰をかがめて早足に通り過ぎること。ここでは、駆けつけるの意。魏から楽毅（将軍。昭王は彼を亜卿として実権を与え、後に彼を使って、斉に対する復讐に成功する）、斉から陰陽五行説で有名な鄒衍、趙から劇辛が来た。「史記」孟子荀卿列伝によると、鄒衍が来たときには、昭王は自ら箒を取って道を清め、邸宅を新しく築いて師事したという。

句法

使二涓人求一二千里馬一　「使AB」（AにBさせる）の意の使役形。

死馬且買レ之、況生者乎。　「A且B、況C乎」（Aでさえも Bである、ましてCはなおさらである。）の意の抑揚形。

況賢二於隗一者、豈遠二千里一哉。　「況…乎」の抑揚形と「豈…哉」の反語形が重なった形。「況」の関係する範囲は「賢二於隗一者」までである。下に反語の文が続いているため、途中で、呼応すべき「ヲヤ」が消えてしまった形。「ましてこの（郭）隗より賢い人は、どうして千里の道のりを遠いと思いましょうか。（いや、遠いと思わず必ずやってくるでしょう。）」の意。

解説

戦国時代の概略

戦国時代になると、鉄製農具の相当な普及と農業技術の進歩による生産力の著しい増大、さらに、大規模な治水や灌漑工事、これらによって広大な土地が新たに開墾されるようになった。それまで氏族制の下で公田耕作という名の奴隷労働に従事していた農民たちは、氏族の束縛を離れてこの新しく開墾した土地を私有あるいは租借して耕作し始めたのである。その結果、諸侯は公田を開放したり、大夫などの私有財産を大幅に認めざるを得なくなってしまった。それは、諸侯・卿・大夫・士という封建的な身分秩序が崩壊していくことを意味するのと同時に、上も下も互いに利を求め激しく争い合う下剋上の世の中になっていくことも意味している。春秋時代から進んでいたこの弱肉強食の時代傾向は、この時代になるとさらに激しさを増し、諸侯の中にはその実権を大夫などに奪われる者もあった。春秋時代には、まだ西周の名目的な権威が残っており覇者の主宰する会議によって一応の秩序は保たれていたが、独立国の実質を備えた国はそれでも十四を数えた。諸侯を統率する覇者がなくなり、完全に力と力の闘いとなった戦国時代には、燕・趙・韓・魏・斉・楚・秦のいわゆる「戦国の七雄」と、僅かに生存する宋・魯・衛などの弱小国のみに淘汰され、西周はただ洛陽付近を領する一諸侯に成り下がってしまった。そして、これら生き残った諸侯たちは、他国との侵略戦争に勝つために富国強兵と中央集権の確立の必要性に迫られ、そのため、氏

族制に固執する旧勢力の排除と、新開墾地ばかりでなく卿・大夫の領地までも直轄地に組み入れていくこととなった。また、農民の支配形態も、氏族を媒体とするものから、「法」による直接的、画一的な統治へと変化した。

このような時代の変化は政治上では、君権の強化を目的とする諸侯と、世襲の特権を温存しながら自己の実力強化を図る貴族勢力との対立として現れ、しばしば内紛へと発展していった。

そこで、諸侯はこれらを制圧し強力な中央集権を確立するために自らの手足となって働く官僚を重用し、国内を直接統治する郡県制度を導入するなどの行政制度の整備に努めた。この新勢力の中心となった官僚の多くは世襲貴族ではなく、支配階級の最下層にあった「士」階級に属する人々であった。彼らは自国の君主だけでなく、自分を認め登用してくれる君主があれば遠い他国へも出かけていった。これがいわゆる「戦国の説客」たちであり、その中から「諸子百家」と呼ばれるさまざまな思想家たちが生まれ活躍した。「史記」はその主なものを六つに分類している。

儒家（孔子・孟子・荀子）、墨家（墨翟）、道家（老子・荘子・列子）、法家（管仲・韓非）、名家（恵施・公孫竜）、陰陽家（鄒衍）、

このほか縦横家（蘇秦・張儀）、農家（許行）、兵家（孫子・呉子・楽毅）、雑家、小説家などがある。

戦国時代という名称は、戦乱が続いたから、あるいは、この時代の十二の諸国の事跡や遊説の士の言説・外交の駆け引きなどの大半を国別に記した「戦国策」という書名によるものとする。

参考

昭王が即位するまでの経緯については、「史記」燕召公世家、楽毅については「史記」楽毅列伝が参考になる。そして燕と斉との対立抗争の話は、「史記」田単列伝まで続くことになる。また、斉の燕侵攻については孟子がかかわっていたことが、「孟子」梁恵王下篇に記されている。これは燕に大勝した後、これを合併すべきか否かについての孟子の考え方を述べたものであるが、「史記」燕召公世家には、侵攻の前に「今伐レ燕、此文武之時、不レ可レ失矣。」と述べたことになっている。

参考までに、「史記」楽毅列伝の一節を掲載しておく。

[本文]

楽毅者、其先祖曰二楽羊一。楽羊為二魏文侯将一、伐取二中山一。魏文侯封二楽羊一以二霊寿一。…（中略）…封二楽毅於昌国一、号為二昌国君一。於レ是燕昭王収二斉歯獲一以帰。而使二楽毅復以レ兵平二斉城之不レ下者一。

[書き下し文]

楽毅は、其の先祖を楽羊と曰ふ。楽羊、魏の文侯の将と為り、伐ちて中山を取る。魏の文候楽羊を封ずるに霊寿を以てす。…（中略）…楽毅を昌国に封じ、号して昌国君と為す。是に於て燕の昭王斉の歯獲を収め以て帰る。而うして楽毅をして復た兵を以ゐて斉の城の下らざる者を平らげしむ。

[現代語訳]

楽毅は、その先祖を楽羊と言った。楽羊は魏の文候の将軍となり、中山国を攻め敗った。魏の文候は楽羊に霊寿の地を領地とし

て与えた。…（中略）…楽毅を昌国に封じ、昌国君を号したのである。そして燕の昭王は斉からの戦利品を取りおさめて帰って行った。楽毅には再び軍勢を率いて斉の城市で降伏せぬものを平定させた。